池田　誠一

【8】近代3（大正）…⑬豊田一族 ⑭耕地整理

1 大正の名古屋

大正時代、名古屋の人口は50万人になり、都市の成長が続いていました。中でも、やはり目立つのは、まず産業です。

大正の名古屋は、今日の名古屋を支える様々な産業が興り、育っているのです（図1）。

分　野	企　業　例（設立年:大正）	備　　考
織機関連	豊田紡織(7)	株式会社化
	豊田自動織機製作所(15)	刈谷
電気ガス	大同電力(10)	東京
	大同製鋼(10)	
	東邦瓦斯(11)	
繊維	近藤紡績所(3)	
	御幸毛織(7)	
木材	浅野木工場(8)	ベニヤ
窯業	日本碍子(8)	
機械	大隈鉄工所(5)	
	高岳製作所(7)	
	岡本自転車自動車製作所(8)	
	榊商会(10)	エルモ
その他	敷島製パン(8)	
三菱関連	三菱内燃機製造・名古屋(9)	航空機
	三菱電機(10)	

注：新修名古屋市史 10 巻(年表:索引)等を参考に作表

図1　大正時代に起業した製造業の例。
今日に残る企業も多い

とりわけ、明治時代に始まった鉄道車両（奥田正香）、自動織機（豊田佐吉）、水力発電（福沢桃介）等は全国でもユニークな成長を遂げていました。それらの中で、豊田佐吉の自動織機は、今日の名古屋を支えている自動車産業につながるだけに、是非ここで取り上げておきたいものです。

一方もう一つ、この時代の都市・名古屋が大変革を遂げた「都市づくり」も、誇りうるものだといえます。この頃から、名古屋は市の周辺で耕地整理法による市街地づくりが始まっていました。さらに大正の後半には将来の都市の在り方を考えて、市域をおおよそ4倍に拡大し、街路や用途地域等のマスタープランづくりをしています。

今回は、このような今日の名古屋を支えるいくつかの事業が始まった大正時代の名古屋を考えてみたいと思います。

2 ルーツの地

(1)豊田一族：織機から自動車へ

今日のトヨタのスタートは、豊田佐吉の自

動織機の発明にあることは、よく知られています。しかし、それから100年余。今日のトヨタ自動車につながる流れは、簡単ではなかったはずです。そのカギは何だったのでしょうか。

明治時代、自動織機の発明に明け暮れていた佐吉が、自ら新しい一歩を踏み出したのは大正の初めとされます。実は、佐吉はその前に事業経営を企業家に任せたため、仕事が思うようにならず、大きな失望感を抱いていたのです。そのため自分の発明品を使って始めた紡織会社は、意志を貫くために自分で資金を集め、運営も弟の平吉や佐助等の親族に任せました(図２)。

ところが、そうして始めた紡織業が、第１次大戦の景気で大きな収益を上げることになったのです。佐吉は、こんどはその利益を自動織機の開発に振り向けることができました。そして、代表的な織機、Ｇ型自動織機が完成しました。

大正15年、刈谷に豊田自動織機製作所が設立されました。こんどはその経営は、娘婿の利三郎や息子の喜一郎に任せたのです。その結果、佐吉が亡くなっても、事業は豊田一族で承継されることになりました。

昭和の初め、喜一郎は、織機事業の将来を考え、新しい事業として自動車に取り組む決意をしました。その資金は膨大でしたが、自動織機等で得た利益を回すことができました。こうして自動車開発に進むことができたのも、佐吉を継ぐ豊田の一族が経営の中心にいたからと云えるのではないでしょうか。

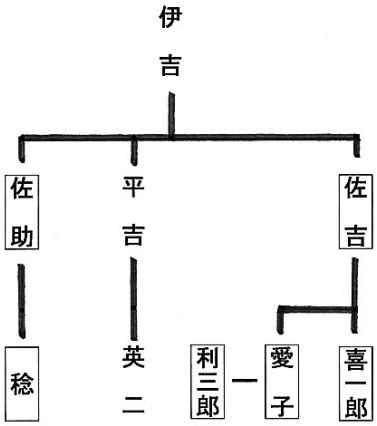

図２　豊田一族の初期の系図。
(児玉)利三郎は養子になっている

昭和10年。佐吉が亡くなって５年。豊田自動織機では、今日でもトヨタグループの行動指針になっている、「豊田綱領」がつくられました(図３)。それは、佐吉の精神を長く伝えていくためのものではあります。しかし同時にそれは、経営は佐吉を引き継ぐ豊田一族が柱になる、ということを暗示しているようにも思えるのです。

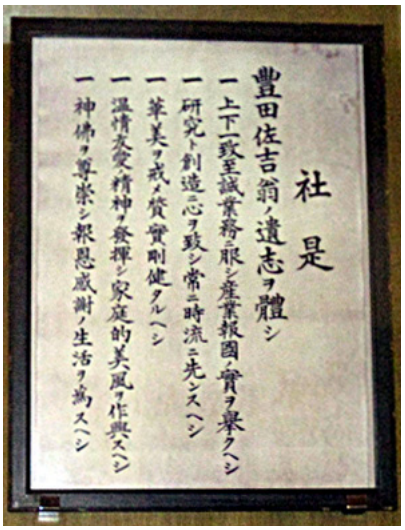

図３　豊田綱領。神仏や報恩がうたわれている
(産業技術記念館内)

(2)耕地整理：工業団地の先駆け

人口の増加によって、明治の末頃から、名古屋は新しい市街地が必要になっていました。しかし、まだ市街地を整備する法律はありません。当時の市域は狭く、名古屋市の周辺は愛知郡が取り囲んでいました(図４)。

明治41年、その郡長になった笹原辰太郎は、将来は郡全体が名古屋の市街地になると読みました。そこで、農地整理のための耕地

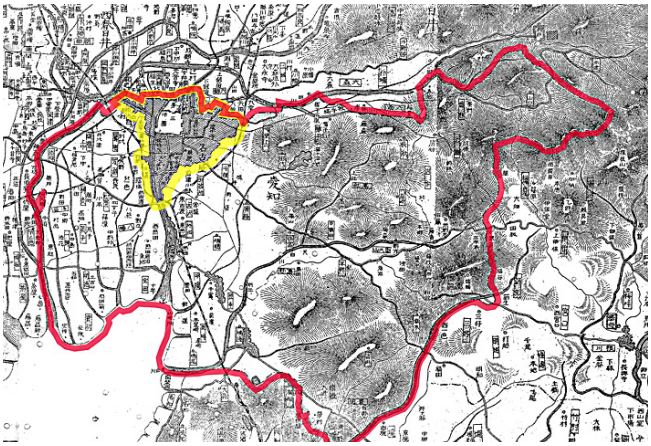

図４　名古屋市と愛知郡（明治38年）。
西、南、東と愛知郡が名古屋市を囲んでいる

整理法で市街地をつくることにしたのです。その最初の構想は、郡西部に運河２本を通すという5000町歩の大構想だったようですが、新任の県知事に否定され、氏は郡長を辞して野に下っています。

その氏が構想したのが、東郊耕地整理です。組合の設立は大正元年。区域は、鶴舞公園南側から、南は牛巻の通りまで。西はできたばかりの運河・新堀川の沿岸で、東は今の郡道までの300町歩（約350㌶）です。

ところが、事業を進めようとすると問題がありました。耕地と違って、市街地となると道路は広く、幹線街路も必要です。また事業費を所有者から徴収するという制度も適用が難しかったのです。この組合は、旧河川敷の譲渡を受けていましたが、やはり不足しました。そこで、従前の土地の持ち分を一定量減らし、その分で道路等をつくり、一部は売却して事業費に充てるという、「減歩法」と呼ぶ方法が考えられました。しかし、これも県は認めません。しかたなく、氏は直接、国の農商務省や内務省と３年がかりで交渉して認めさせたといいます。この減歩法はその後、都市計画法の区画整理事業の中に引き継がれ、今日の区画整理の骨格の概念になりました。

こうして行われた東郊耕地整理組合の事業は、新しい価値を生むことになりました。工場の集積です。事業中の大正中頃から、第一次大戦の戦争景気もあって、運河沿いの土地には、工場が立地し始めたのです。一帯は、名古屋瓦斯、服部紡績、日本碍子、岡本自転車などの大工場を始め、多くの工場が並ぶ地域に変わっていきました。

日本の工業団地の最初は、昭和の初めの東京太田区の下丸子の耕地整理された一帯だとされています。しかし、ここ新堀川沿岸は大正時代にすでに工場が集積しており、日本でも初期の工業団地といえるのではないでしょうか。そしてその従業員の人達の住宅が東の台地に向けて進んでいきました。（このことは、この連載の第１回で、少し紹介しました。）

笹原辰太郎は、その後、郡の東側の八事付近で、これもユニークな、ロンドンの田園都市を範にした「山林都市」づくりの耕地整理に取り組んでいます。

（3）その他

＜水力発電＞

明治の末、事業家の福沢桃介は、知人の誘いもあって、名古屋電灯の株を買い占めていました。１年後には筆頭株主になり、常務取締役（実質トップ）に就きました。しかし、名古屋電力との合併を決めた株主総会でのゴタゴタに嫌気がさし、常務を辞しています。そして水力発電の適地を求め、木曽山中を歩き回っていました。

ところが、大正２年、不況の中で会社の経営が行き詰まり、再び呼び戻されたのです。戻るや否や、氏は木曽川の電力開発に着手しました。開発には御料林の木材輸送の確保が必要で、まず代替する森林鉄道を建設します。

大正	事　　項	備　考
３年	名古屋電灯社長に	明治 43 年取締役
５年	木曽森林鉄道開通	水利権のため
７年	木曽電気製鉄を分社。社長に	発電と製鉄事業のため
８年	賤母発電所竣工	1.6 万 kw.
１０年	大同電力設立	日本水力等と合併
同	大同製鋼設立	大同電力から分離
同	大桑発電所竣工	1.3 万 kw.
１１年	須原発電所竣工	1.1 万 kw.
同	大阪への送電開始	248km、15.4 万 V
１２年	桃山発電所竣工	2.6 万 kw.
同	読書発電所竣工	4.1 万 kw.
１３年	大井ダム発電所竣工	5.2 万 kw.
１５年	落合ダム発電所竣工	1.5 万 kw.

図５　福沢桃介の木曽川開発に関連する年表。
桃介は昭和３年、現役を離れた

さらに余剰電力を使用する事業として電気製鉄を考え、木曽電気製鉄という会社を分社しました。さらに、名古屋地方だけでは余るため、関西の会社と連携して、電力の不足する大阪方面へ送電する会社も立ち上げたのです（図５）。

木曽川には、大正６年に着手した賤母発電所を皮切りに、次々に水力発電所を建設していきました。そして13年には、世界でもトップクラスのダム式発電所・大井発電所を完成させたのです。

その桃介の活動の拠点が、名古屋でした。東区の二葉御殿と呼ばれる邸宅には、女優だった川上貞奴と同居し、連日、名古屋財界の面々が集まって、賑やかだったといいます。

大正時代の後半に、三菱が名古屋に航空機製造の拠点を置き、続いて電機製造を始めたのも、名古屋は電力が豊富だったことが大きな要因だったといいます。

３紀行 豊田一族の地

… 原点の遺産を尋ねる …

豊田佐吉の発明の拠点は、今の西区にありました。トヨタグループは、そこにグループの経過を伝えるための記念館をつくっています。今回はまずそこを尋ね、さらには一族が住んだ東区の白壁地区に足を延ばしてみます。

＜産業技術記念館から＞

地下鉄の亀島駅の東改札を出て左に、３番出口を出ます。左に進み、ＪＲのガードをくぐり、交差点を東に渡って、北に進みます。通りを500㍍程行くと、右側にトヨタ産業技術記念館の赤レンガのある建物が見えてきます。

トヨタ産業技術記念館の入り口

この記念館は、明治44年に造られた豊田敷布工場、後の豊田自動織機栄生工場跡地です。そのトヨタグループ発祥の地に、平成６年、グループの基となった繊維機械と自動車の開発経過を保存し、伝える施設が建設されました。

敷地内を右手奥に進むと、明治38年に造られた豊田商会（木造）の建物と、大正14年に建てられた豊田紡織本社事務所が改修保存されています。後者は、トヨタ自動車の設立

保存された豊田商会。佐吉の住居兼研究室だった

保存された豊田紡織本社事務所。
この建物で、トヨタ自動車が生まれた

総会が開かれたという記念すべき建物です。

玄関に戻って記念館の本体に入ります。入口のホールには、佐吉が知恵を絞って開発した環状織機が館のシンボルとして動態展示されています。その奥からが繊維機械館になります。綿を紡ぐところから最新の自動織機まで、技術の流れに沿って展示があります。多くが実物を動かして説明できるのが特徴です。その奥を通路に沿って進むと自動車館です。ここにはトヨタ自動車の様々な技術の推移と過去からの代表的な車種の展示があります。そして、とくに喜一郎が苦労した創業期の説明に力が入れられています。

繊維機械館の展示場は旧工場の建物が使われている

自動車館に復元された初の量産乗用車・
トヨダＡＡ型。昭和11年。3,685円とか

この記念館は、世界からの観光客も多く、名古屋の産業遺産として大変良い施設になりました。

＜白壁地区へ＞

さて、ここでは豊田の産業技術は保存されましたが、私的なものは排除されました。そこで、もう一つの豊田の物語がある、東区の白壁地区を訪ねてみましょう。

産業技術記念館の中に、市の観光施設を回る「メーグル」というバスの停留所があります。これに乗って、二葉館前で降りると、白壁地区です。

西に道路を渡って右に、３本目を左に曲がると白壁町筋です。右手の金城学院を過ぎた辺りに豊田喜一郎邸がありましたが、昭和の

白壁町筋の町並み。豊田喜一郎邸があった

豊田利三郎邸跡。門と塀が残された

初めに、広い敷地を求めて昭和区の南山に移っています。

次の角を通り過ぎて少し行った右手に、大きな門と長い塀の続く所があります。ここが豊田利三郎邸でした。早くに門と塀を残してマンション化し、今は建て替えの時期にあるようです。

保存された豊田佐助邸。
今は見学可能な施設になっている

少し戻り、角を南に１本行って右に曲がると、右側３軒目に豊田佐助邸があります。白壁地区に４軒あった一族の居宅のうち、清水口の交差点の西にあった佐吉邸は早くになくなりました（図６）。残る、喜一郎邸、利三郎邸は先に見たように建替えられており、当時が残るのはこの佐助邸だけです。ここはまず、利三郎が洋館を立てて新婚の時に住みました。数年で先ほどの大きな敷地に移った後、大正の中頃、佐助が譲り受けて和館等を建てたようです。洋館は木造のタイル張りで、中も２階の廊下の中は和室という、和洋折衷の建物です。この建物も保存が問題になりましたが、名古屋市が借用し、市民利用施設として公開することになりました。

図６　大正時代の豊田一族４家の居住地。
一族が集まっていたのがわかる

洋館の屋上は陸屋根になっており、豊田一族の子供の良き遊び場だったと聞きました。大正になって財力を付けた豊田一族が、このお屋敷町に集まることになったのでしょうか。佐助邸を出て右に、幹線道路を左に曲がると、500㍍強で、地下鉄の高岳駅があります。

４ 独創ということ

今回紹介した事項の中心人物は、豊田佐吉と笹原辰太郎です。この二人の仕事はまさに独創的なものでした。

佐吉の発明は、学問で得られたものではありません。自らを信じ、その工夫と執念が生み出したものと云えます。しかし途中では、企業家に見限られるなどという日々を経験することにもなりました。

辰太郎の仕事も、順風満帆ではありませんでした。理想に向かって少し強引過ぎたかもしれません。西部の大構想の時は知事と対立し、東郊耕地のときは地主に見限られて、組合長を追われることにもなりました。

独創的ということは、これまでのルールを破ることです。そこには、既成概念との軋轢は避けられません。しかしそれをやり遂げた人があったからこそ、今日、他に語り得る名古屋の遺産になったのだといえます。

〈主な参考文献〉

①和田・由井『豊田喜一郎伝』
（2002、㈶名古屋大学出版会）
②佐々木葉「名古屋の区画整理の礎を築いた人物
笹原辰太郎について」（2011、土木史研究講演集31）
③池田誠一「町並み保存・覚書③」
（2015、日本電気協会中部支部）